

社会 553

児童の賞罰相当度認識を変える状況要因

—1. 言い訳・正当化条件による賞罰相当度認識の変化—

○ 徳井 千里 田中 純夫 沢崎 俊之

(お茶の水女子大学) (千葉県警察本部) (埼玉工業大学)

【問題と目的】 安香ら(1986~1990教心総会)は、メアリーランド大学のHamilton, V.L.、ミシガン大学のBlumenfeld, P.らと共同で、日米の小学校児童の規範意識の比較調査を行ってきた。

ここでは、2種類の規範を想定している。規範意識のうちの賞罰相当度認識という側面では、それらは次のような特徴を示す。一つは上昇を志向する志望的モラリティ(志望M)で、上限に接近する行為への賞相当度は高く認識され、接近しなかった場合の罰相当度の認識は低い。他は下限への違背を顧慮する義務的モラリティ(義務M)で、下限基準が守られた場合の賞相当度は低く、守られなかった場合の罰相当度は高い。

しかし現実の生活の中では、規範に対する認識は一律なものではありえない。達成が要求される水準や義務の強さの段階に応じて、また様々な場面の状況に応じて、柔軟に変化することが期待される。

そこで本研究では、まずベースラインとなる規範(以下「基本規範」という)が設定され、次いでそれに様々な状況要因が付加され、それぞれの賞罰相当度が問われた。それにより、条件の付加に伴う児童の賞罰相当度認識の変化が吟味される。

【方法】 (1)調査対象：千葉県内の公立小学校9校9学級に在籍する5年生、304名(男子161名女子143名)。

(2)調査時期：1991年2月~3月

(3)基本規範の領域：基本規範は以下の3領域の22規範(表1参照)。それぞれの規範に合致しない行為(悪行為)と合致する行為(善行為)の、計44項目を作成した。

①<達成>=運動を含めた学業面での達成。②<手続き>=学業面での達成や、学校生活の円滑化のための慣習的なきまり。③<モラル>=社会道徳。

(4)状況要因の種類：基本規範に、次の2種類の状況要因を付加した。①言い訳条件=日常的には、悪行為における「悪さ(ここでは罰相当度)」認識の低減を予期して付加する条件だけを「言い訳」と呼ぶが、ここでは、善行為における「良さ(ここでは賞相当度)」認識の増加を予期して付加する条件も含める。言い訳の内容には、{困難}{課題の困難さ}、{同調}{他の大勢の行動への同調}{状況}{善行為の妨害、悪行為の促進が予想される偶然的要因}、{合理化}{侵害の否定や被害者の非難}、の4タイプがある。14規範に2タイプずつの条件を付

加し(表1のA・B)、計56項目を作成した。②正当化条件=慣習的きまり(手続き的規範)に対立するより高次の善という条件。この付加により、慣習的きまりの遵守(善行為)への賞相当度及び違背(悪行為)への罰相当度認識は、いずれも低減することが予期され、時には賞罰が逆転して認識されることもある。{自己実現}{向社会性}の2タイプがあり、8規範にどちらか1つを付加して、計16項目を作成された。

(5)調査方法：各項目に「たいへんほめられる(5)」から「たいへんしかられる(5)」まで、11段階の評定を求めた。

(6)分析方法：評定値をもって賞罰相当度得点とし、「しかられる」の5~1は、-5~-1に変換された。基本規範については賞罰相当度得点の平均が求められた。条件つき規範については基本規範の得点との差の平均が求められ、対応のあるt検定を行った。

【結果と考察】 分析の結果は表1に示されている。

(1)基本規範の構造：①善行為：各領域の賞相当度の平均は、<達成>1.9、<モラル>1.7、<手続き>1.1だった。また、<達成>の1,2,5番と<モラル>の19,20,21,22番は<手続き>のどの項目よりも得点が高かった。賞相当度認識が高い<達成>の「良い点をとる」、<モラル>の「弱い子をかばう」などの項目は志望Mであり、全般に低得点の<手続き>の各項目は義務Mであることが示唆される。また<達成>の1,2,5番(例「成績があがる」)や、<手続き>の12,17番(例「身の回りをいつも整理整頓」)など、領域内でも比較的高得点の項目は、より上昇志向的であり自律性が要求される規範とみなされる。

②悪行為：各カテゴリーの罰相当度の平均は<達成>-0.9、<手続き>-2.0、<モラル>-2.8だった。「意地悪をする」「運動会の練習をいい加減にする」などモラルや手続きへの違背は、「試合で敗ける」など達成の失敗よりも「しかられるべき」と認識されている。一方<モラル>ではどの項目も罰相当度が高い(-2.4~-3.1)のに対し、<手続き>では項目間の罰相当度に開きがあった(-0.5~-2.6)。規範に背く行為への罰相当度認識は規範に従う義務の強さによって異なると考えられる。

(2)言い訳条件の効果：①善行為：28項目中15項目で、賞相当度認識が有意に増加した。予想に反して得点が有意に減少したのは、<達成>の2,5番の{困難}と{状況}、<モラル>の20番の{合理化}の5項目である。「成績

がある」「水泳のテストに合格」という規範は、言い訳条件のタイプを問わず、条件がつかない行為の方がより「ほめられるべき」と認識されている。一方「弱い子をかばう」については{同調}で賞相当度認識が増加しているのに対し{合理化}では減少している。

概して、{困難}や{状況}の中でも「忘れ物を取りに戻ったが」「片付けがあったが」など、言い訳が自己の責任の範囲内にある条件では、賞相当度認識はあまり増加しない。それに対して、{同調}や「相手が強かったが」「大雪が降ったが」などの、外的な要因に打ち勝つ条件では大きく増加した。

②悪行為：28項目中20項目で、罰相当度認識が有意に減少した。逆に罰相当度認識が有意に増加したのは<達成>4番の{状況}である。他者に責任を負わずことでより「しかられるべき」と認識されていると考えられる。{同調}の「皆もそうしていたので」という言い訳は<手続き>の8番以外では罰相当度認識をあまり軽減していない。全体的に罰相当度認識を大きく軽減したのは、<達成>2,5番の{困難}や、<モラル>19,20,21番の{合理化}、<手続き>14,15番Aの{状況}、などの条件である。

(3)正当化条件の効果：すべての項目で、正当化条件が伴うと罰相当度認識は有意に軽減し、賞相当度認識は有意に低減した。善行為の賞相当度認識へは、言い訳条件と逆の効果が表れている。全体的に{向社会性}の方が罰相当度認識を大きく低減している。

とくに「割れた花瓶を片付ける」条件のもとで「着席しない」こと、「迷子の世話をする」条件で「遅刻すること」は、平均して賞に相当すると認識された(0.7,1.3)。これらが「ほめられるべき」と認識されているのは、向社会的な目的のために積極的に慣習的規範から逸脱している行為、と理解されているためと考えられる。また、それらの条件のもとで規範に従う行為は、「しかられるべき」と認識されている(-1.4,-2.1)。

これらの結果から、5年生の児童は、規範に合致する／しない行為への賞罰相当度認識を状況に応じて変化させる柔軟な規範意識をかなりもっていることが示唆された。しかし一部の項目では、予想とは異なる反応がみられている。規範や条件の内容を吟味したうえで、彼らの規範意識の構造をさらに明らかにしていくことが今後の課題である。

表1 基本規範の賞罰相当度得点および基本規範と条件付規範との差の平均

規範領域	番号	規範の内容	基本規範 得点	言い訳条件 A		言い訳条件 B		正当化条件				
				タイプ	内容	得点差	タイプ	内容	得点差	タイプ	内容	得点差
<善行>												
達成	1	良い点をとる	2.2	難	難しかったが	-0.1	状	雑かめて	-0.1			
	2	成績があがる	3.2	難	難しかったが	-0.3**	状	忙しかったが	-0.4**			
	3	問題が解ける	1.1									
	4	試合に勝つ	1.0	難	相手は強いが	+0.7**	状	メンバーが揃わないが	+0.3**			
	5	水泳のテストに合格	3.2	難	苦手を頑張つて	-0.3**	状	実力がでなかったが	-1.5**			
	6	跳び箱を飛べる	0.9									
	手続き	7	忘れ物を返す	0.8	難	難しかったが	+0.3**	同	皆は違つたが	-0.1	自	より良い方法があるが
		8	忘れ物を返す	1.1	難	難しかったが	+0.1	同	皆は違つたが	+0.4**	自	違う勉強をしたいが
		9	忘れ物を返す	0.9								
		10	忘れ物を返す	1.4								
		11	忘れ物を返す	0.9	難	難しかったが	+0.2**	同	皆は違つたが	+0.5**	自	より良い方法があるが
		12	忘れ物を返す	1.6								
		13	忘れ物を返す	1.1	同	皆は違つたが	+1.5**	状	汚れていなかったが	+0.7**	向	友達を手伝いたいが
		14	忘れ物を返す	0.8	同	皆は違つたが	+0.7**	状	片付けがあったが	+0.0	向	花瓶を片付けたいが
		15	忘れ物を返す	0.7	状	大雪だった	+0.4**	状	ものを取りに戻つたが	-0.2	向	迷子の世話をしたいが
		16	忘れ物を返す	1.2								
	モラル	17	忘れ物を返す	1.6								
18		忘れ物を返す	0.7	合	相手が反則したが	+1.0**	合	負けそうだったが	+0.5**			
19		忘れ物を返す	1.8	同	皆は違つたが	+0.8**	合	損をするが	+0.3*	向	友達をかばいたいが	
20		忘れ物を返す	2.6	同	仲間外れになるが	+0.3**	合	その子も悪いが	-0.8**			
21		忘れ物を返す	1.8	状	うまく話せないが	-0.2	合	喧嘩をしかけられたが	+0.1			
22		忘れ物を返す	1.7									
<悪行>												
達成	1	悪い点をとる	-1.7	難	難しかったので	+0.6**	状	間違えて	+0.6**			
	2	成績がさがる	-2.0	難	頑張つたが	+2.1**	状	忙しかったので	+1.1**			
	3	問題が解けない	-0.6									
	4	試合に敗ける	-0.3	難	相手が強くて	+0.0	状	メンバーが揃わなくて	-0.2**			
	5	水泳のテストに不合格	-0.5	難	練習したが	+1.0**	状	実力がだせなくて	0.0			
	6	水泳のテストに不合格	-0.3									
	手続き	7	忘れ物を返す	-0.5	難	わからなかった	+0.2*	同	皆もそうしたので	-0.1	自	より良い方法があるので
		8	忘れ物を返す	-2.4	難	難しかった	+0.7**	同	皆もそうしたので	+2.2**	自	違う勉強をしたいので
		9	忘れ物を返す	-2.5								
		10	忘れ物を返す	-2.1								
		11	忘れ物を返す	-1.2	難	難しかった	+0.3**	同	皆もそうしたので	+0.2*	自	より良い方法があるので
		12	忘れ物を返す	-2.6								
		13	忘れ物を返す	-2.4	同	皆もそうしたので	+0.3**	状	汚れていなかった	+0.3**	自	違う練習をしたいので
		14	忘れ物を返す	-2.1	同	皆もそうしたので	+0.2*	状	片付けがあった	+1.2*	向	友達を手伝いたいが
		15	忘れ物を返す	-1.5	状	大雪だった	+0.9**	状	花瓶を片付けていて	+2.8**	向	花瓶を片付けた
		16	忘れ物を返す	-1.8								
	モラル	17	忘れ物を返す	-2.4								
18		忘れ物を返す	-2.4	合	相手が反則したので	+0.2	合	負けそうだったので	-0.1			
19		忘れ物を返す	-3.0	同	皆もそうしたので	+0.2	合	迷惑がかからない	+0.8**	向	友達をかばいたくて	
20		忘れ物を返す	-3.1	同	仲間外れになる	+0.2*	合	その子も悪い	+0.9**			
21		忘れ物を返す	-2.6	状	うまく話せなくて	+0.7**	合	しかけられた	+1.0**	a)	いじめられている子を助けるため	
22		忘れ物を返す	-2.6									

条件のタイプは、難=困難、同=同調 状=状況 合=合理化 自=自己実現 向=向社会性、をあらわす。
 * **は、t検定の結果が有意であったことをあらわす(*=P<.05, **=p<.01).
 # a) この条件は、発表3の調査項目で使用された。